



中村俊定文庫
文庫 18
140
2



元孫

諸

水

之

中

中



八月廿日 観山亭 真行

とい月や船の事も入中進ん
 此南より河の海へ雁 山尺
 おまゝの色紙わけて相お結く 観山
 柳^カで駢しし思ふより舞^カ朵 艶士
 常やうま^カ道好くわ^カ能く 常和
 腰抱くよやとく産^カとら 路朋



ありといふわく火又中何所
 執筆
 蘿蔔してやぐ櫛一納豆
 尺
 追まの海人の丹月小舟の
 山
 目関^{メツカ}がらうがおの西^セ巖
 士
 うう委^ウ屋も初^{ハツ}まうも中の所
 洋
 情^ナ多^タ解^カり^リ借^カり^リと^ト下^カ下^カ下^カ
 味
 待^マせ^セや^ヤせ^セ今^{イマ}も^モせ^セ今^{イマ}も^モ呼^コば^バは^ハは^ハ
 山
 横^{ヨコ}お^オら^ラら^ラく^クと^トら^ラの^ノ何^{ナニ}渡^{ワタ}

名
 俗して又色白し病より
 尺
 粘^ネり^リも^モも^モし^シ乳^ニの^ノと^トあ^アき^キ
 洋
 雨^{アメ}の^ノ月^{ツキ}今^{イマ}ぬ^ヌぬ^ヌ也^ヤ又^{マタ}隣^{トナリ}
 士
 盆^{ハシ}の^ノわ^ワく^クれ^レを^ヲ質^シの^ノ中^ノに^ニ
 明
 多^タの^ノ心^{ココロ}を^ヲ幸^{サイ}向^ムけ^ケれ^レ抱^ダて^テよ^ヨら
 味
 帳^{チヤウ}の^ノ歩^フん^ンて^テ是^{コノ}の^ノ人^{トシテ}
 尺
 金^{カネ}瓶^{ビン}が^ガこ^コら^ラは^ハ赤^{アカ}の^ノぬ^ヌぬ^ヌの^ノ山^{トシテ}
 山
 こ^コら^ラの^ノ湯^ユれ^レ除^スる^ルも^モせ^セん

夕暮の空をよみしむらさき
娘を母のふしむらさき
雷の音は海を渡るも胸を
月をよみしむらさき
若くはよみしむらさき
おろしやよみしむらさき
おろしやよみしむらさき
おろしやよみしむらさき

洋味 朋山 尺洋 土朋

やうやう小蛇の暮るる香
まをよみしむらさき
おろしやよみしむらさき
おろしやよみしむらさき
おろしやよみしむらさき
おろしやよみしむらさき

山尺 味土 洋和

短尺堂他行ぐ際早吟

舞の御つら朝の老女うか

八七

明の御つらまむ御の御し

駿士

舞の御つら御の御つら

山尺

三乃く御つら御の御つら

白士

中風を御つらの御つら

八七

尺世を御つら御の御つら

八七

ウ

三味線の御つら御の御つら

白

七夜乃御つら御の御つら

山

舞の御つら御の御つら

八七

牛玉の御つら御の御つら

八七

この御つら御の御つら

山

三乃御つら御の御つら

白

悪も御つら御の御つら

八七

の御つら御の御つら

八七

戦慄

中
 流るる人の石垣府此司サ 無倫
 雁鴎の飼む唯ふと存 執筆
 其のくまの海の園をの園加城
 大名貸乃中款り某
 屋行請ふやうまう不動坊
 十ヶは遠のく丸らの菓子
 水くまの世とらうと揉り
 姉のやうなる綿つとが母
 士 陽 雪 叔 倫

三味線とや倉の人のうのまじり
 是初めの月一雨此の形
 屋敷のつらつららの長提
 海はまの鏡よあゆみ
 暮病や氷の上をみる松が
 こそ人かともあれ皆色
 一海の四智か明も海種
 月雪降るも長橋の物
 我 倫 陽 夕 士 雪 叔 我

辰君がむさうと墮^{ツケ}て後の京
 長き柳より一むら
 中此恋がわかくも元のは
 心のははりの音^ナがわかく
 志^シちよもあふ山はまはまど
 卯^ウの友をちよむ法^{ホウ}を
 夕^タ 叔^シ士^シ 倫^{リン} 陽^{ヤウ} 隼^{ジュン}

世吉

秘^ヒ蔵^{ゾウ}が白濁^{ハクダク}の種^{タネ}を紙^{カミ}磨^マ汁^{ジュ}
 扇^{アウ}を^と思^{おも}ふ折^マて上^ウ原^{ハラ}
 童^{ドウ}の^あ鼻^{ハナ}は^は狭^ヒう^う岩^{イワ}翁^ウ
 小^コ猿^{イヌ}の^あ頬^ホは^はぬ^ぬく^く文^{モン}
 大^{ダイ}濠^{オウ}眉^{メイ}は^は水^{ミヅ}を^と埋^ウむ^む秋^{アキ}の^あ風^{カゼ}
 作^サり^の花^{ハナ}を^とう^う角^{カク}れ^れ新^ニら^らぬ
 其^{ソノ}角^{カク} 艶^{エン}士^シ 岩^{イワ}翁^ウ 尺^{シツ}牝^{ヒメ} 常^{ジョウ}陽^{ヤウ} 松^{マツ}貞^{チン}

ウ

夕角 山夕
 執筆
 此幅の紙麻川へ舟も入
 ころろと船もかきかき
 早立られ所化何つら
 せんもあつたも
 それをく提提とて
 何と駿駿と云ふ

角 士 州 翁
 角 翁 州 翁

夕角 山夕
 執筆
 此幅の紙麻川へ舟も入
 ころろと船もかきかき
 早立られ所化何つら
 せんもあつたも
 それをく提提とて
 何と駿駿と云ふ

角 士 州 翁
 角 翁 州 翁

條上して世を全るをよほきて 條 士
 之をこころいふ事なきをいふ 眞
 けの國やけのききとれ半つて 夕
 おのやきもむとも人の一圓 角
 止こと事院着る松の月 角
 初下るもも半月白く 角

春

秋津列の武蔵乃梅や梅の兄 蘭風

句列

春草やまご 趣ゆの泊地 調和
 帯才あつ何や 疾草半月 立志
 味所の呼吸も 山を濃く 山夕
 こねるも 世房のそん 水後云 其角

中

十二

打つる人ふとて寺は毎 沾徳
正月の廿日も如て雑者 嵐雪
梅の香も眉もよまう 峯白
あ餅や柳の奇生初ち 秀和
ま柳よゆの草やうさめ 不角
下を去るぬ草は此醋 無倫
梅のこれ青とくたさく 一蜂

句乱

春の物忘れを初る 浪華 來山
帳周し金水川の句帳 艶士
越後より此文通旅者の
心とてとて
わが家やわが名人の春 京 助叟
古三白の善悪順に人中は陰陽
生死の晝夜の道なりと
の法をこれ靴鞆くはる 雲列 風水
おふとの風やうら海や一庭 露言
白樺の枝入とていふ言ふ 子英

多岐路をさしゆく計八重庭 哲精
 玉女音カの香の程を去乃不立 松貞
 陽をけゆりののこけ樹草の 直方
 陽をけや嬉しく水汲を極めし 立志
 うららかに書院のむすぶる音 嵐雪
 苔や立替とあら幸れ門 活生
 鶯の色と強し樹頭を 和英
 うららかに書院のむすぶる音 規山

苔の目眩を今 出るとさうの一團
 うららかに書院のむすぶる音 艶士
 幸多しは鳥のさしゆく柳のふ 典倫
 うららかに書院のむすぶる音 氷花
 のこけや陽瓶の竿は研信 常笑
 白鳥や燈の油をけぬる局 子氏
 玉女音カの香の程を去乃不立 木下
 玉女音カの香の程を去乃不立 玉夕

白魚了し瓜うり振ふりや 紫むら屋や 倫りん々
 夕ゆふ月つきや白しろ雲うみれ日ひの影かげに 山やま夕ゆふ
 月つきのおよぬぬりいき川がわの中なか 旭あす志し
 海うみやわがもあらくふふ波なみを 隨したが友とも
 よくあふありてあであり 至いた町ちやう
 らるせとたたけららふみと風かぜの足あし 本蘭らん月つき
 海うみや浪なみのたけあつあつ川がわ 艶えん士し
 暖ぬるや鴨かれれのぬぬる海うみを 東とう潮しやう

屋や馬うまれ踏ふまりり垣かきの梅うめ 艶えん士し
 梅うめと舞まははりりた人ひとややる 神かみ叔しやく
 這こ毒どくやや狭せの沈しづししのの水みづ 止と水みづ
 上かみ船ふねやや仲なかつの斗たけ存ぞん海うみのの心こころ 青あお洋やう
 月つきととひひののちちやや梅うめ 俊しゅん叟そう
 梅うめとと出でててもも知しれれ七しち左さ根こん 宋そう人じん
 燈とうををたたててるる海うみののままやや名なれれ海うみ 山やま尺せき
 枝えだとと餅もちおおりりをを毒どくのの心こころ 駿しゅん士し

この梅や花入の咲とちか
春をほひつ外他はなほ
花の梅春水
花いまも白ひを
珊瑚のり
湖月
岩前
尺牘
八角

三福廻すうすもあ
さるあや
清正
其角
艶士
松栴
八角

後信子かくて胡葱喰う女 一帆
古きもよりの道と長局 枳口
今よりいふは海にわたる 鱗風
古名は通るこそやま 雀扇洲
雪の深きよそはなはなり 子英
清のちよ空とある 奇居中 長雅
馬方くや 延世れすこは 止水
笠たけし 傳はしとわぬと 妻戸

花は又月鳴くも鳴きぬのり 士口
むせめたりあるかたれ 言求
清のち人 鳥かた 青洋
清のちの九修のちや 尺艸
清のちの九修のちや 岩翁
古字のちよふ 帆け如 風調
清のちの九修のちや 女我
清のちの九修のちや 管子

花

上野より志賀
山より

松葉未捨 花ももや言し 下多 調和
無らちか風もさうり 一と盛 嵐雪
ゆらり言寄あはれ 草木花はを 挙白
ゆらりや海と云ふもろも 濁り 岩翁
と川花や 定て ぬ念人の 都 艶士
薩摩の 花拂ひ けり 芳名 郷 溪石

上野より

海より 徳士 名もさうり 此は 花 其角
花もも 幕とく の 細少 止水
眉毛の 面神とく の 山 青洋
きよは 花の 文の 信牌 花の 和英
花も 花の 之れと 馬の 娘 乙中
引合て 負うる 方や 花思ひ 三東
花も 花の 隠士 有見 海とく 我笑
花も 花の 雨ふり けり 足跡 只云

猿もれは身をとり度し世是 昔精

櫻 上りやう

ねんごうて桜わらうきをみか
な後徳を信りてあまの
御座やせあゝ鯉のそと
遣ふあゝ瓶とひりり
御座 艶士
御座 蓬雨
御座 百里

額田王の秋山ついでに

女良の娘未娘のさゝのん
定阿りてそを流地極る
を念むる三里の海や
のり物を出ぬ女りりやま
御座 木甲
木甲のやまの上の八重桜
わゝるは後まを世の桜 伴利
下部の傳はるる一葉

甲

十九

をいりきり代のり見とぎもあは
儿帳のへりは思ぬそりうう流
きりうはは梅よりあんと路七
口疾き淡薄の耳一吐く音六すよ
るりてもいもくきむりたー系
繪つゝ若安軒の草まを信りめは
額情流るりたのこー投るる勝を
杖よ信と流るとそりたの比はたも
セツハツ履よりたりたをぬー幟の
幕羽織の勝處を通くー心明あ
さんさよ小袖毎ぬり志すそら
るたしん弁天より清信りぬ

清明のさかりよむさきの白く直方
く吹果ぬそのまらきと流

くくくあはるふ月す川蓮銭 艶士
け流よりがうまもさし流る全

此の用ふるまをあたむおろくは
と高ねのた今ひ四角とこころ
わらもはら

あをうのPおろくもれ客 風姿
とねあのまはたはひりも流るか 方

丑一 細く垣のほころひ 安
 きぬ 猫も出て帝の袖のあ 士
 小原のひねりひねり 楊梅枝 方

 而いし回きんじあつりまきまは四らん
 引もまぬたのまはついでまぢやあなうらうら
 是しつむ西頻ふて神のまをまぢ
 ろう病りうやや 養乃あこまや 観山
 媛朝やひらぬ 河原屋 俊史
 河原屋 養乃あこまや 養乃あこまや 養乃あこまや 養乃あこまや

小原の詞

晋其角

初瀬雄信の市女三枝のおれはの
 うらむつと昔と移は織後津及此
 水社のゆゑを海神の神すきけけけ
 立りたりて都大路の神を海内女の
 舟やうらつたまはあふあやうらうら
 縄もとさあつとけりしをひて名
 まらきん 越のやうなけこのりま
 せく 春書あふあやうらうらまき
 けりうらまきうらうらうらうら
 此は神のうらまきうらうらうら

志やうはなはるきなまふ

水戸相国は苑より本を居るうらみあり
気色すはるけは風冷きとるをを
温籠りていづれかまは御まきとるま
何れとていふまは日とるき世を解て
経るる町のまはるまはるまはる

腕中のまはるいりまはるの川 專吟

くは打ては振まはるまはる

火とくねははるまはる

まはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはる

